

中英語の職業名 英語名前史学の観点から

堀田 隆一

はじめに

現代英語の姓には Smith, Miller, Shoemaker, Webster, Wright など職業に由来するものが多い。この伝統は中英語期に遡る。この時期に姓の固定化が進み、職業名が人名に変わっていった過程が英語人名史の重要な一部である。本発表では、Fransson, Thuresson, Clark 等の先行研究を基に、中英語期の職業名に基づく姓の種類、語彙論、意味論、形態論などを考察する。特に -maker, -ster などの職業名を形成する形態素に注目し、職業名が姓に変わる過程を古英語や近現代英語と比較する。最後に、英語名前史学が英語史研究にどのような貢献をなし得るかを論じる。

1. 中英語期の職業名（に基づく姓）の驚くべき多様性

Fransson の調査によると、イングランドの 10 州における 1100～1350 年の納税者リストに基づき、職業名の種類は布業 165 種類、冶金業 108 種類、織物業 25 種類、物作り・物売り 107 種類と、近代よりも多様であった。中世の技術発展や職業名の英語・フランス語・ラテン語の併存がその要因である。また、girdler は文字通りは「ガードル職人」だが、実際には金属製品全般を作る職人であるなどの複雑な事情もあった。

近代英語期の職業（名）は多様性の喪失の時代として特徴付けられる。1350 年以降、職業（名）ベースの姓の種類は減少し、Smith, Cook, Tailor, Turner など一般的な職業を表わす姓が普及した。これに対し、Arrowsmith, Cheesewright のような細分化された名前は影をひそめた。多様性が失われた背景には、by-name が家に属する family name へ発展することで硬直化した可能性がある。

一方、古英語の職業（名）の多様性はどうかだろうか。古英語には一般的な職業を表わす語は存在したが、中英語期のような細分化された職業名は少なかった。それがノルマン征服を機に職業名が多様化したと考えられる。中英語期の上位 25 件の職業名には、Tailour（仕立屋）、Chapman（行商人）、Marescal（馬丁）などが含まれる。

2. 英語における姓の起源と発達

まず古英語の人名フォーマットについて述べておきたい。古英語の人名は「idionym (+ by-name)」で構成され、idionym は 1 種類のみが基本であった。しかし、もう 1 つの名前要素が付されることもあり、これが by-name と呼ばれた。by-name には家系、職業、居住地、性格・特徴などを示すものがあった。by-name はノルマン征服以前から部分的に使われていたが、本格的な発展と普及はノルマン征服後である。

ノルマン征服後、by-name は社会的身分の高い者から低い者にかけて採用され、13～14 世紀にかけて一般に広まった。ただし、地域差もあり、北部では南部よりも普及が遅れた。

中英語期に by-name が発達したのはなぜだろうか。Clark によれば、イングランドでは idionym の選択肢が少なく by-name で補う必要が生じたのだろうという。大陸ではノルマン征服以前にも by-name を用いる習慣があり、それも影響しただろう。共同体の拡大や徴税などの手続きが増え、人名の正確さが求められたため、ノルマン貴族の慣習が模倣されたものと考えられる。

次に、中英語の人名フォーマットについて述べる。中英語の人名は「baptismal name + by-name」で構成され、baptismal name はキリスト教社会における名前であり、by-name がそれを限定するために添えられた。by-name は家族・家系を表わす役割を果たすことが多かった。

ここで by-name と family name の違いについて述べておきたい。by-name は「準ずる名前」ほどの意味で、idionym だけでは識別力が弱い場合に付け加える補足的な名前である。by-name は緩く現代の family name に対応するが、歴史的には一応区別する必要がある。1350 年頃までは by-name は近現代よりもフレキシブルであった。

3. 中英語の by-name の分類

Clark によれば、by-name は家族関係ベース、職業名ベース、地名ベース、表現力のあるニックネームの 4 種類に分類される。職業名の by-name にはフランス語からの借用語と本来語がある。フランス語からの借用語には barber, butcher, carpenter などがあり、本来語には cok, herde, smith などがある。また、動詞ベースの派生語や複合語も多く、bruere/breuster（ビール醸造者）、heure（石切り職人）、bokebynder（本の装丁者）などの例が挙げられる。

主な複合語の第 2 要素を挙げておきたい。1. -MAKER: Aketonmaker, Aruwemakere, Aunseremakere など。2. -MAN:

Butterman, Candelman, Capman など。3. -MONGERE: Bukmongere, Ketmongere, Chesemonger など。4. -WIFE: Flaxwife, Silkwife。5. -WOMAN: Silkwoman。6. -WRIGHT: Arkewright, Bordwright, Bowewright など。7. -ESTER: Bakestere, Blacchester, Blakestere など。

4. 同一職業に対する様々な名前

Fransson, Thuresson によると、同一職業でも様々な名前が存在する。1. チーズを作る（売る）人: Cheseman (1263年), Cheser (1332), Chesemakere (1275) など。2. 織り手、織工: Webbe (1243), Webbestere (1275), Webbere (1340) など。3. 小袋を作る人: Pouchemaker (1349), Poucher (1317), Pocheler など。4. 金細工職人: Goldsmyth/Gildsmith (125), Gilder/Golder (1281) など。5. 車（輪）大工: Whelere (1249), Whelster (1327), Whelwright (1274) など。6. ブタ飼い: Swynherde (1327), Swyneman (1275), Swyner (1257) など。7. 猟師: Hunte (1203), Hunter (1301), Hunteman (1235) など。

上記のような職業名異形態は英語史研究上、以下の価値があると考えられる。1. 音韻論・綴字論：異音・異綴字が通時的変化と方言的変異を示唆。2. 形態論：多様な語形成法が通時的変化と方言的変異を示唆。3. 統語論：定冠詞や前置詞の脱落、名前の語順の問題。4. 意味論：意味拡張、メトニミー。5. 語彙論：語形成か語借用かの問題。6. 言語接触：古英語、ノルマンフランス語、ラテン語からの影響。7. 辞書編纂学：異形態の記述。

5. 中英語の職業名（に基づく姓）の歴史的・言語学的意義

まず職業名の姓の語源・由来の解明に資する。中英語の職業名の研究は、現代英語の姓の語源・由来の解明に寄与する。例えば、Baxter（女性パン職人）は男性名の Baker から派生したが、男性名としても使われるようになった。ここで Baxter にも含まれる接尾辞 -ester をめぐる問題を提示しておきたい。Fransson によれば、中英語期には 42 種類の -ester をもつ by-name が存在し、多くは女性を指すものとされるが、男性を指すものも存在した。MED は -ester を主に女性語尾としつつも、男性をも指すようになったとする。

おわりに

中英語の職業名の姓への発展は、多くの言語学的示唆を含む。いくつか列挙しよう。1. 納税者リストなどの資料は作成された時期と場所が分かっているため、中英語の音韻論研究に寄与する。2. 新語の発見、あるいはすでに知られている語の早期の文証例の発掘が見込める。3. 早期の例を通じて、語源や語義の理解が深まることがある。4. 同一の職業名が異なる方言に現われるので、中英語方言研究に資する。5. 同一の職業が異なる地域で異なる呼ばれ方をするので、中英語方言研究に貢献する。6. 当時の職業文化・産業が明らかになる。7. 現代の by-name の語源・由来を説明する。

英語名前史学は、英語史研究に貢献する重要な分野であり、中英語期の職業名の多様性とその変遷を理解することは、現代英語の姓の起源と発展を解明する鍵となる。これにより、英語名の文化的・歴史的背景を深く理解できるようになるだろう。

主要参考文献

- Clark, Cecily. "Onomastics." *The Cambridge History of the English Language*. Vol. 1. Ed. Richard M. Hogg. Cambridge: CUP, 1992. 452–89.
- Clark, Cecily. "Onomastics." *The Cambridge History of the English Language*. Vol. 2. Ed. Olga Fischer. Cambridge: CUP, 1992. 542–606.
- Coates, Richard. "Names." Chapter 6 of *A History of the English Language*. Ed. Richard Hogg and David Denison. Cambridge: CUP, 2006. 312–51.
- Durkin, Philip. *Borrowed Words: A History of Loanwords in English*. Oxford: OUP, 2014.
- Fransson, G. *Middle English Surnames of Occupation 1100–1350, with an Excursus on Toponymical Surnames*. Lund Studies in English 3. Lund: Gleerup, 1935.
- Hough, Carole, ed. *The Oxford Handbook of Names and Naming*. Oxford: OUP, 2016.
- Laing, Margaret and Roger Lass. LAEME: *A Linguistic Atlas of Early Middle English, 1150–1325*. U of Edinburgh, 2007. Available online at <http://www.lel.ed.ac.uk/ihd/laeme2/laeme2.html>.
- Thuresson, Bertil. *Middle English Occupational Terms*. Lund Studies in English 19. Lund: Gleerup, 1968.